

山村再生支援センター創設 森林資源の持続的活用を図る 宮林教授が初代センター長に

林野庁の補助事業として本年度から「社会的協働による山村再生対策構築事業」が展開されることになり、その中核組織として5月22日、東京農大世田谷キャンパス内に「山村再生支援センター」が創設された。本年度の事業費は3億5000万円。初代センター長には、東京農大地域環境科学部長の宮林茂幸教授＝写真＝が就任した。

この事業は、山村固有の資源が有する環境、教育、健康面での諸機能の活用を図ることで、「低炭素社会づくり」に寄与しつつ、山村の再生を支援するのが狙い。東京農大、日本森林技術協会、NPO森のエネルギー研究所、博報堂などとの社会連携で創設された「山村再生支援センター」は、各地の山村と関連企業とのマッチングをはじめ、再生の取り組みを全面的に支援するなど、事業の中核的役割を担う。

計画では、間伐材使用を進めることで森林資源の持続的な活用を図る一方、削減されたCO₂について企業との排出量取引を支援する。

また、木質バイオマスの安定供給のために、山村再生支援センターの指導で、森林組合などからチップ加

工工場、さらに電力・製紙企業への供給を推進する。

このほか、森林資源を利用した新素材・エネルギーにかかわる環境ビジネス、山村の癒し効果を活用した教育、健康ビジネスを山村地域で展開する。

宮林教授を代表とする東京農大地域環境科学部森林総合科学科の研究グループは、多摩川源流域を対象に、地域再生と農環境教育に取り組んできた実績がある。過疎化や少子高齢化に悩む全国各地の山村再生に、大いなる貢献が期待されている。

山村再生支援センターの事務局は、世田谷キャンパスの図書館4階に設置された。

宮林教授の話「日本の森林資源は、世界的にも例のないほど充実しているが、森林管理・林業経営の面では、きわめて厳しい状況にある。伝統的な知恵や工夫も生かして、山村再生に取り組んでいきたい」



「つばさのないニワトリ」展

東京農大「食と農」の博物館

東京農大の協力機関である(財)進化生物学研究所の主催で、「つばさのないニワトリと飛べない鳥たち」展は10月4日まで開催されている。

同研究所では世界で唯一、翼と足の爪の無いニワトリが半世紀を超えて系統維持されている。これは1951年、イギリス原産のニワトリのライトサセックス種の異系交雑の実験中、突然変異個体として発見された。鳥の主翼の形成、発達、維持には相当のエネルギーが消費されるので、その分固体形成に回り、また、飛んで逃げない、引っかかれないなどの管理上の有利性もあり、プロイラー生産に新たな道が開ける可能性を秘めている。

今回は、この系統維持の道のりを紹介するとともに、絶滅鳥を含めて「飛べない鳥たち」の進化学的意味を考える展示になっている。

MODIS のリアルタイム画像

東京農大「食と農」の博物館の一角で、衛星による地球観測データをリアルタイムで見ることができる。これは、NASAの衛星テラ(Terra)に搭載されたモディス(MODIS)と呼ばれる地球観測センサーから送られてくる観測データで、東京情報大学の受信アンテナで直接受信、画像処理して表示している。同大学では、東アジア域の環境モニタリングなどを行い環境の変化などを調査している。